

『原発は終わった』の書評

哲郎の新著『原発は終わった』が、緑風出版から 12 月に刊行された。1 月 5 日現在、Amazon Review に 3 人の方々が★5 個で、厚意あふれる書評を投稿くださった。中でも、技術者ではない女性 S&B さんが書いてくださった下記の文章は、望外の幸せであったので、転載させていただく。

技術者の視点から、原発の不合理・不条理を解明した良書

2018 年 1 月 5 日 S&B ★★★★★

悲劇などなかったように(本書第 7 章より)年末年始の街を彩るイルミネーション、行き交う人たちの浮わついた足どり。

原発事故からもうすぐ七年になるのですね。報道ではあまり取り上げられず、特に大都市圏では話題に上ることも少なくなった〈原発問題〉。この事故で故郷を失った 10 万人近い人のいることを知ってから、顔を背けることが出来ずにおりました。

〈原発は終わった〉、率直で奥行きのある解釈自由なタイトルがこの本のすべてを物語っているようです。原発開発から事故の顛末・復興の現状に至るまで、データや図版を参照しながら丁寧に検証解明する本書は、技術系に疎い私にもわかりやすく、著者の豊富な経験や見識がうかがい知れるというものでした。構成も主張も論理的で説得力がありました。技術的な側面は勿論、地域社会のあり方にまで言及する本書は、さりげなく哲学的でもあります。ドキュメンタリーや技術論など、これまでの原発がテーマの本とは一線を画している印象です。

この国が推し進める人を蔑ろにした原発政策や復興策。その理不尽さへの深い怒り、被災者・避難者への共感が静かに伝わってくるようでした。

本書の論証や見解への反論・批判があれば、ぜひ伺ってみたいと思っています。

原発は潜水艦の動力装置と原爆用のプルトニウム生成装置の流用によって開発されました。人を殺傷する兵器から生まれ、命を脅かす放射線を撒き散らす原発が人と共存出来ないのは当然のことのようにも思えます。

よく科学技術は戦争と共に発展してきたといわれますが、戦争はしょせん殺戮と破壊でしかない、人類にとってなんと不幸な歴史でしょう。命を育む私たち女性には受け入れ難いものです。もちろん女性にも好戦的なサイコパスはときおり出現しますけれど(笑)。

日本の現政権と大企業が、科学技術を兵器・軍事に取り込むべく動きだした現在進行形の今。科学や技術に携わるすべての人たちは、命に寄り添い、人を救うという、あるべき原点に立ち返ってほしいと心から願っています。

自然災害は大きな被害をもたらしますが、復興回復は着実に前進させることができます。しかし、地震・津波・原発事故の三重災害に見舞われた福島の、特に放射能にまみれた原発の解体・汚染廃棄物処理には正確なメドなど立たないでしょう。経済的にこれほどのリスクを負い、国土を汚し、人を退けながら再稼働への動きを止めない現政権。飽くなき原発への固執から、為政者たちの“核弾頭”への渴望が見て取れます。

本書の終章近く、技術論から少し離れた福島取材行(第七章)が特に印象に残りました。廃炉や廃棄物処理を巡る人々の動き、そこから見えてくる国や県の思惑。原発事故のその日まで、街を闊歩する私と同じように生活していた福島の人や家族。そうした普通の人たちが原発事故を機に、人ではなく原発被災者・避難者のレッテルでお荷物扱いされているこの国の現実。何の落ち度もない人々が住みかを失い故郷を追われて、、悲劇は今も続いたまま、禍根は未来に影を落としたままです。都会に住む私たちこそ「悲劇などなかったように」を返上して、福島へのまなざしを取り戻さなければ・・・。

“汚染され打ち棄てられた無人の町”の描写が胸に迫りました。